

## ミュージアムと公民館の「しあさって」？

「公民館のしあさって」という書籍を編集発行しました。未来というと大げさですし遠い希望に寄り掛かりすぎるのは辛い。かといって目の前の物事に忙殺されるだけなのも辛い。そのような理想と現実の間を往来する振り子のような気持ちを込めての「しあさって」です。

では、その「公民館のしあさって」が、ミュージアムとどのような関係があるのか？そのようなお話の前に、もう一つキーワードを挙げておきたいと思います。それは、「ワークショップ」です。学生時代にハンズオン展示等のプランニングを手掛ける会社でアルバイトしていた私を拾ってくれたNPO（団体のキャッチコピーは「遊びと学びの秘密基地」）は、ワークショップの振興普及をしていました。2000年初頭の当時、ワークショップは参加体験型学習とよく呼ばれていました。裏を返すとそれは、参加が出来ない・体験を伴わない学習のあり方へのカウンターであったようにも思います。ですので、自ずとそこでは、参加と体験や経験をどのように醸成するか？ということが重要な関心事項として議論や研究や実践がなされていくこととなりました。

月日が経って、そのNPOが開催していたワークショップイベントは10万人の来場を記録するなど、ワークショップという言葉も随分と普及したように感じました。であるからこそ、今一度それらが本来もっていた可能性を捉え直したいとも考えていました。それらを少し列挙します。

・学びという営みを「学校」から解放すること：多くの人が、教える・学ぶという営みが、空間的に学校、時間的には学生時代、人的には教師と生徒というように限定的に捉えているように感じていました。ワークショップというものは、それを拡張し再定義する可能性があったと思います。

・配給から生成へシフトすること：答えが上から降ってくるような配給型のような学びから、答えをともに対話を通して作り出していくという枠組みにシフトさせる可能性があったと思います。

・遊びや学びの体験の地産地消モデルの醸成：食の地産地消、金融の地産地消といったケースはよく議論になります。同じように、その地域の風土に即しつつまたその風土そのものを育むような遊びや学びを生む可能性があったと思います。

これらは言い換えると、社会教育或いは社会教育施設の可能性というように捉えることができると考えますし、そのポテンシャルはもっともっと発揮できる素地があろうかとも考えています。それが、「公民館のしあさって」の本をつくりたいと思った理由でもありますし、公民館とミュージアムの「しあさって」がシンクロする領域であるだろうと感じるところでもあります。とはいえ、理想や理念が生まれそれを実現する場所としての現場には、様々な角度からの重荷が背中に乗せられ、疲弊感や無力感が漂っているようにも感じます。個人・プロジェクト・組織・地域・社会の成長。それが、なんだかちぐはぐに、ばらばらになっていような気がします。これらの相互作用が大切とするならば、じゃあ、どうしたら良いのでしょうか？

マネジメントという言葉は本来、管理をすることだけを指すものではなかったそうです。管理はコントロール。Managementとは、「do something difficult」「deal with problems」というもので、「みんなでどうにかこうにかしていく」というニュアンスが近いのだそうです。みんなでどうにかこうにかして行って良い方向になるように動いていきたい。その方法を、どうにかこうにかみんなで見出していく。ささやかにでもそのような時間をみなさまとともにすることができたら幸いです。画面越しではありますが皆様にお目にかかれましてを楽しみにしています。

### 熊井晃史

10代が音楽、建築、料理、ファッション、デザイン、アート、映像など、クリエイションの原点に出会うことができる学びの集積地「GAKU」の事務局長。様々なクリエイターや専門家の方々と連携して運営中。その他、学芸大こども未来研究所・教育支援フェローやギャラリーとをが・共同主宰も務める。過去に、NPO法人CANVAS・プロデューサーなどを経て、2017年に独立し現在に至る。一貫して子供たちの創造性教育の現場に携わっている。社会教育の可能性を探る書籍「公民館のしあさって」（ポードアインク）を2021年に編集発行。